

月刊「キリスト教書評誌」

# 本のひろば

December 2019 12

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2019年12月1日発行(毎月一回発行)第744号

● 出会い・本・人

「聴く本」が好き 原 敬子

● 特集「LGBT」を学ぶなら

この三冊! 中村吉基

● 本・批評と紹介

小泉 健著 主イエスは近い 上田 彰

エマニュエル・カトンゴレ、クリス・ライス著/佐藤谷子、平野克己訳

すべてのものとの和解 榎本 恵

日本キリスト教文化協会編

近代日本にとってのキリスト教の意義 鈴木範久

鎌野善三著

3分間のグッドニュース「福音」 山崎ランサム和彦

石原知弘著

バルト神学とオランダ改革派教会 佐藤司郎

近藤勝彦著 死のただ中にある命 左近 豊

加納和寛著

アドルフ・フォン・ハルナックにおける「信条」と「教義」

安酸敏真

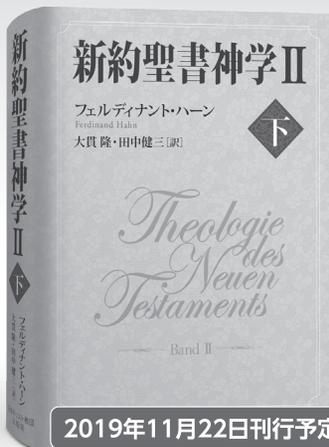
松島雄一著 神の狂おしいほどの愛 大頭真一

既刊案内

書店案内

ドイツを代表する新約学者の集大成的著作、ついに邦訳完結！

# 新約聖書神学Ⅱ 下



フェルディナント・ハーン

大貫 隆・田中健三〔訳〕

神学の諸課題について、新約聖書全体がどのように語っているのかを詳細に解説。「キリスト教正典としての旧約聖書」「啓示」「救済論」を扱った上巻に続き、下巻では「教会論」「終末論」を扱う。大学の教科書として書かれているため読みやすく、神学生にも最適。

◆A5判 上製・488頁・13,200円

2019年11月22日刊行予定

シリーズ好評発売中 各巻13,200円

新約聖書神学Ⅰ上 大貫 隆／大友陽子 訳

新約聖書神学Ⅰ下 須藤伊知郎 訳 曲版  
出来

新約聖書神学Ⅱ上 大貫 隆／田中健三 訳



『新約聖書神学』邦訳完結に寄せて  
大貫 隆 東京大学名誉教授、日本新約学会会長

本書は神学史（第Ⅰ巻）と主題的論述（第Ⅱ巻）を組み合わせ、包括性において際立っている。読者は否応なしに、神学的な統一性に関する問いへ誘われる。日本でも今後標準的な著作となっていくことは間違いない。

悩み、苦しむ現代人の心を癒す言葉に満ちた、ナウエンの名著を復刊！

## ナウエン・セレクション 今日のパン、明日の糧

暮らしにいのちを吹きこむ366のことば

ヘンリ・ナウエン 嶋本 操 監修 河田正雄 訳  
酒井陽介 解説

傷つき、揺れ動き、迷い、神を求め続けたヘンリ・ナウエン。その歩みの到達点とも言える366の短い黙想を収録。ゆっくり味わうことで、私たちにキリストの息吹が吹き込まれ、神を愛して生きる者に変えられていく。

◆四六判 並製・424頁・2,640円 2019年11月25日刊行予定





インタビュー

## 「聴く本」が好き

人から話を聴いて、聴いた話を文字に起こす。いわゆるテープ起こしという作業だが、現代、テープがICに替わってもテープ起こしという言葉は残っている。

インタビュー本を作るには、話を聴きたいインタビューアーが話してくれるインタビューに向き合い、質問し、その質問に答えてもらう形で対話し、一部始終を録音し、録音したものをすべてを文字に起こし、文字化された資料をインタビューアーが再読しながら最終<sup>テキスト</sup>文書を作成する。この場合の著者は誰？ 著者は、話した人と聴いた人、両人ということになる。

私がテープ起こしを含めたインタビューで文書を作成した初めての経験は中学一年の八月六日。広島市の平和記念公園原爆資料館前にて。高齢の被爆者に話を聴いた。

写真の中で中学生の私がおばあさんにマイクを向けている。一九四五年のあの日、どこで被爆したか、どのような

状況だったか、今日までどのように生きてかを聴いた。私は今でもあの日の公園の暑さ、おばあさんの静かな声、私たち中学生の耳を支配する悲しみ、眉間のしわなどを身体的なレベルで覚えている。確かに聴いたと覚えている。

四十を過ぎ、インタビュー資料を基に神学を試みるという仕事に着手して、広島での経験を思い出した。あれは、「聴く」経験がいかに「読む」「書く」経験を超えているかを思い知らされていた頃のこと。中学生の頃「聴く」ことを知った。心に刻まれたあの身体の痛みを思い出した。聴く経験は外からの声を受容し、人の内奥で痛みを伴う創造へと進む。それは共同作業と連帯の実り。「聴く本<sup>インタビュー</sup>」が好きなのはそれを感じるからだ。

数あるインタビュー本の中で最も好きなのは、スベトラーナ・アレクシエーヴィッチ『チエルノブイリの祈り』。話す彼女からも、聴く彼女からも、「人間」からの話を聴く。

(はら・けいこ 上智大学神学部准教授、援助修道会会員)

原 敬子



# 「LGBT」を学ぶなら この三冊！

中村吉基

(なかもらよしき・宗教とLGBTネットワーク代表日本基督教団教師)

「LGBT」という言葉は、新しい言葉ではありません。しかしわが国では、二〇一五年以降、急速に知られるようになってきました。その要因の一つに二〇二〇年のオリンピック東京大会の影響があります。二〇一四年末、国際オリンピック委員会の定める「オリンピック憲章」が改定された際に、そこに「性的指向 (Sexual Orientation)」

による差別的禁止を加え、人権尊重の意志を強く示しました。日本の社会は東京大会を控え、急速にLGBTへの

理解に努めるように変化してきました。現在では、国内で約七割の人が「LGBT」という言葉を知っているという調査(二〇一九年、電通ダイバーシティラボ)も出ています。

LGBT(レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランス・ジェンダー)の略称に含まれない性のあり方もたくさんあるために、「LGBTQ=Queer」と表記したり、「SOGI=ソジ/ソギ、Sexual Orientation and Gender Identityの略」という言葉が性的マイ

ノリティ全体を表す言葉として用いられています。本稿では「LGBT」を用いさせていただきます)は、国内におけるさまざまな調査によれば、人口比約二〜九パーセントといわれます。しかし、「自分の周囲に、さぞういう人はいない」とおっしゃる方は実に多いのです。多くて日本人口の11人に1人はいるであろうLGBTが「見えない存在」になっていることは事実です。

私は数年前まで東京・新宿二丁目付近の教会で宣教してきました。多くの人は「新宿二丁目」(アジア最大のLGBTの街)に対しての印象は「女装する男性のいるところ」だというものがあります。しかし、実際に来てみるとそんなことはありません。実に多様な人びとが集っています。奇妙な人たちでもない、私たちが普段接している人たちと変わらない人たちであるのです。つまり人間の性は「見えない」のです。

そしてそのうちの多くの人たちは、自分の性を公言することができない人たちでもあるのです。

石田 仁著『はじめて学ぶLGBT』

LGBTについては、その知識や情報が日々アップデートされているといっても過言ではありません。十年ほど前までは、私たちが日本語で読める文献のほとんどが北米などの出版物の翻訳でした。しかしこの本を含め、今回ご紹介する書籍は三冊とも日本人の著者

であると、「性自認」「性的指向」「カミングアウト」「アウティング」「同性婚」「パートナーシップ制度」「ダイバーシティ・インクルージョン」「ゲイカルチャー」「HIVとエイズ」「ポーズ・ラブ」など時折私たちが耳にする言葉について詳しく書かれています。そしてただ知識を得るだけではなく、当事者を理解することによって「周りの人ができること」が何であるのかという方向に導いてくれます。

によるものです。今年(二〇一九年)に発売されたこの本は、「はじめて学ぶ」と銘打たれている通り、現在のLGBTに関する知識をやさしい筆致で

筆者は全国各地の自治体、宗教、教団、学校での講演に招かれる機会が多くありますが、そこに集まる聴衆の立場や年代はさまざまです。著者も日々情報が増えていく中で、ほとんど毎回内容を変えて「LGBT入門講座」や「LGBTと宗教」について話していま

網羅するものです。中高生くらいの年齢から読むことができ、LGBTの当事者に向けても、それをサポートしようとする周囲の人にもおすすめの一冊です。たとえばここに書かれているトピックからいくつかの言葉を拾いだし

すが、この本はLGBTの「今、ここ」(現在地)についてわかりやすく解説しています。筆者の講演も当初は、当

事者である私自身が歩んできた道について、特に若い方々に語る場所からスタートしましたが、ただそれだけでは高校生や大学生たちに「ふん、こんな人もいるんだ」という受け止めだけに終わってしまうことが多々ありました。そこで講演を聞いていただいた方には、一人ひとりがLGBTのサポーター(ALLY=アライ)になってほしいと、着地点を変えて話すように努めています。この本は、ただ「LGBTの人たちがこの世の中にいるんだ」ではなく、「今、自分に何ができるのだろうか」……。そんな思いを持って読んでいただければと思います。

特定非営利活動法人ReBt監修『「ふつう」ってなんだ?』

LGBTであることを自認する人たちの中に、十代の人たちも多く見受けられるようになってきました。筆者自身の歩みを顧みると、中学生になった



### 『はじめて学ぶLGBT』

基礎からトレンドまで

石田 仁：著  
ナツメ社  
2019年刊  
四六判264頁  
1600円（税別）



### 『「ふつう」ってなんだ？』

LGBTについて知る本

特定非営利活動法人 ReBit  
薬師実芳・中島 潤：監修  
殿ヶ谷美由記：漫画  
学研プラス  
2018年刊  
A4変型判120頁  
4800円（税別）



### 『虹は私たちの間に』

性と生の正義に向けて

山口里子：著  
新教出版社  
2008年刊  
A5判362頁  
3600円（税別）

頃、同性に惹かれるようになり、そのことを誰にも相談することができませんでした。当時中学生が読むアイドル雑誌などには性についての悩みを相談するコーナーがあり、そこには年に数回、同性に興味を持つティーンからの相談が掲載されていたものです。しかし、その回答には「二〇歳くらいまでには、治る」と書かれてあるものが大部分でした。つい最近まで、特に同性愛は異常であり、疾患であるとされてきました。しかし、現在では、WHO（世界保健機関）や米国精神医学会、日本精神神経学会などが同性愛を「異常」「倒錯」「精神疾患」とはみなさず、治療の対象から除外しています。文部省も一九九四年に指導書の「性非行」の項目から同性愛を除外しました（EMA日本ホームページから）。

この本は子どもたちとともに読んでほしい一冊です。まだまだ子どもやティーンエイジャー向けの本が多く出版されているわけではありませんが、この本はフルカラーの大型判でイラストや写真が多く、総ルビ付きです。子どもたちや若い人たち（小学校高学年から）に向けて編集されています。編集の意図の一つはLGBTを知るということだけではなく、「自分の性のあり方に悩んでいて……」という人たちのためにあるのだと監修者たちは記しています。かつての筆者がそうであったように自身の性のあり方に悩む人は「暗闇を手探りで前進するような感覚」にかられていました。ぜひ、この本は子どもたち一人ではなく、子と親、生徒と教師、子どもたちと教会の人たちで読み、分かち合ってほしいと願います。そしてタイトルにあるように「ふつう」ってなんだろう？「あたりまえ」ってなんだろう？「みんなと同じ」「平均」ってなんだろう？と考える

と示すこと」、③「父権制社会・教会を変革するための連帯を広げる一歩を作ること」を目標とするとあります。どうして聖書の言葉が人を攻撃する武器に変えるのでしょうか？そして自分のあり方を否定されて、教会に通えなくなった（追放された）LGBTの当事者のキリスト者たちは今もあとを絶ちません。この本はその「断罪」に使われた主な聖書の箇所丁寧に丁寧に向きます。ぜひ教会の聖書研究、学習会などに使ってほしい一冊です。

私たちの生活領域の中でおそらくすべての人がLGBTの当事者にすべ

いたきたいのです。これらの言葉が消極的に捉えられる時、必ずそこに痛みを抱える人や傷つく人たちがいるということを知ってほしいのです。ぜひ、学校や教会にも備えていただきたい一冊です。

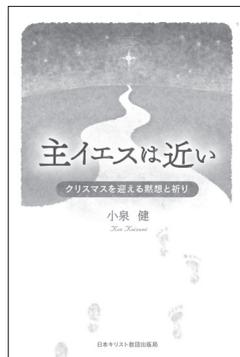
#### 山口里子著『虹は私たちの間に』

「キリスト教はLGBTをどう考えているの？」「ゲイの牧師さん、ありえないくない？」そんな声がよく筆者に投げかけられます。日本の仏教教団や新宗教の人たちの多くは、伝統的な家族観や慣習に囚われている向きがありますが、キリスト者から出てくる問いは「教義」や「聖書解釈」の部分での「引っかけり」が大きな部分を占めます。この本の「はじめに」によれば、①『聖書によれば同性愛は罪』と聖書の権威を使って主張することはできないと明らかに示すこと、②「神の創造はセクシュアリティを含めても」と豊かであ

出会っているだろうと筆者は考えます。しかしそれに「気づかない」私たちがいていいのでしょうか。多くの人が今も苦しみ、悩み続けています。私たちが理解することから和解放することができるよう、ぜひこれらの書物に触れていただきたいと願っています。

# 「祈りの『かがみ』と共に 主を待つ

〈評者〉上田 彰



主イエスは近い  
クリスマスを迎える黙想と祈り  
小泉 健著

本書は同じ著者による『十字架への道 受難節の黙想と祈り』の姉妹編です。

書評子は著者の留学の前後、関係する教会で同労者として交わりを持つ幸いを与えられました。著者は留学前の段階から、様々な時代・教会の祈りに関心を持ち、集めておられました。その影響かどうか分かりませんが、礼拝の際に教職が立つ説教壇の裏の棚には様々な祈祷集（教会の典札祈祷集と、個人で編纂されたもの）が備えられていました。書評子も時折手を伸ばし、自分で行う礼拝の中で祈り（いわゆる牧会祈祷）の言葉を整え、発展させるために用いさせて頂きました。礼拝の中で祈りの言葉を磨くことは、当然生活の中での祈りの言葉を磨くことにつながります。試験的に、礼拝での祈りの際、それらの祈祷集から一編を選び取り、自分で用意した祈祷の前に朗読を試み

たことがありません。教会員から「詩を読んでいるようだった」と言われて、自分の普段の祈りが「歌うような祈り」からずいぶん遠いということに気がつかされました。

自分の祈りを整え、結果として自分の信仰を整えるに至る「かがみ」のようなものが必要になるのではないのでしょうか。「かがみ」はまずは「鏡」です。自分の祈りの言葉がどのようなものであるかを知るために、信仰の先達の言葉と比べ、並べてみる。ついで「鑑」が必要になります。信仰の先達の言葉は当然、良い手本となるでしょう。最近、牧会する教会で教会規則の制定を行いました。最近、「教会規則は、自分たちの信仰の『かがみ』であり、自分たちの普段の教会生活からかけ離れたものではない規定が並んでいるから、まずは自分たちの教会生活を振り返る（鏡）」の教会規則を参照し、そして発展させる（鑑）」

のにも教会規則を用いよう」と説明していました。同じように、祈りの言葉にもまた「かがみ」が必要だというわけです。本書は従って、待降節の時期を過ごす私たちの「祈りの『かがみ』」として用いられたときに、真価を発揮することでしょう。

本書は、聖書箇所と祈り以外に、小さなメッセージによって構成されています。たとえていうならば、ドイツの祈祷日課集である『ローズンゲン』が旧約と新約の聖書箇所を毎日示す中で、二つの聖書箇所が「見えない糸」で暗示的に何重にもつながっていることと似ています。その暗示を読み手が黙想の内に受け止めて祈りとメッセージを（言葉にならないことも多いにせよ）心の中に浮かび上が

らせるのと同様に、待降節の祈りもまたメッセージ（普段でいえば礼拝説教や祈祷会の聖書講解）を伴って深められます。今回本書に目を通し、信仰生活を振り返る機会を持つ中で気づかされたことは、掲げられた祈りを紡ぎ出した教会が、どのような歴史的背景と特徴を持つものであるのか、短い説明が巻末にあればもっと良かった、ということ。祈りが歴史を持ち、自らその歴史の中に招き入れるということを教えられました。

キリストの到来をこの祈りの本と共に待てる幸いを喜びたいと思います。（うへだ・あきら 日本基督教団伊東教会牧師（四六判・二二〇頁・本体二二〇〇円＋税・日本キリスト教団出版局）

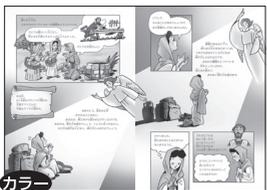
親しみやすいマンガ的表現で  
聖書の物語を描きおろすシリーズ

## マンガ絵本 聖書ものがたり クリスマス



金斗鉉／具本曙 作  
人気イラストレーターが綿密な考証に基づいて描く、世界ではじめてのクリスマスの出来事。

A4判 上製・26頁・1,320円



カラー

『こころの友』連載を  
待望の単行本化



## 神の祝福を あなたに。

歌舞伎町の裏から  
ゴッドブレス！ 関野和寛

新宿・歌舞伎町裏の大久保で、「ゴッドブレス！（神の祝福）」を届ける牧師 関野和寛。その笑って泣ける苦闘5000日の記録。

四六判 並製・88頁・1,100円

クリスマスの期節を  
祈りつつ歩むために



## 主イエスは 近い

クリスマスを迎える黙想と祈り 小泉 健

アドベント第1主日から1月6日の公現日まで、毎日読める御言葉とショートメッセージ、信仰の先達たちによる祈りを掲載。

四六判 並製・120頁・1,320円

日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18

☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457

E-mail eigyou@bp.ucci.or.jp (価格10%税込)

http://bp-ucci.jp

## 新しく創造される シャロームへの旅

〈評者〉**榎本 恵**



シリーズ〈和解の神学〉  
すべてのものとの和解  
エマニエル・カトンゴレ、  
クリス・ライス著  
佐藤容子、平野克己訳

私が、今回の「すべてのものとの和解」の書評依頼を編集部より受けたのは、ちょうどブラジル・サンパウロのジュラ柳原牧師の家に滞在中のことだった。彼はブラジルアライアンス教団の牧師で、私と同年代の日系二世。二〇一六年、AWF（アライアンス・ワールド・フェローシップ）の会長に選出された。全世界のアライアンス教団のリーダーが、中南米教会から選ばれることも、また日系人が選ばれることも、初めてのことだったようだ。

滞在中、私たちはいろいろな話をした。中でも、現在起こっている隣国ベネズエラの状況について、彼はAWFの会長として声明を出すことを真剣に考えていた。現大統領と国会議長の対立が激化し、外国からの援助が拒否され、民衆の生活は困窮の極みにある。

そのような中、ベネズエラの教会からは彼の元へ悲鳴の

いう言葉を、「まるで延々と大皿が並んだビュッフェ会場のようになってしまう」と一刀両断する。あらゆる人々が、それを自分の好みで選び取り、語り出すために「和解」の本来の意味が不明瞭なものとなってしまうというのだ。彼らは既存の「和解」という言葉をそれぞれ「個人の救いとしての和解」「多様性を賞賛するものとしての和解」「不正義に言及するものとしての和解」、そして「消火活動としての和解」と分類し、それらの長所と短所を指摘する。そして、彼らの目指す和解のビジョンを「神の物語のゴールとしての和解」、また「神から与えられた贈り物」としての和解であると位置付けるのだ。

彼らは「和解」とは旅であると断言する。それは専門家の理論でも、テクニクでもなく、神と共に、神が新しく

ような叫びが届く。彼は私に一枚の写真を見せてくれた。それは、乳児院に収容され、段ボールの中に寝かされた乳児の写真だった。私は思わず「ここにモーセがいるではないか」と叫んだ。そう、ナイル川を葦のカゴに入れられ流されたモーセのように、この子たちは段ボールの中で眠っている。彼は静かにこう言った。「私たちが政治的問題にコミットすることは難しい。けれども、このモーセたちを救うことは、私たちの使命なのです」。

さて、この『すべてのものとの和解』という、デューク大学「和解センター」の二人の共同ディレクターによって書かれた本は、大変示唆に富み、今まさに世界が直面している問題に、もう一度正面から向き合っていく勇氣を私たちに与えてくれる。著者のクリス・ライスとエマニエル・カトンゴレのは、まず、私たちのイメージする「和解」と創造されるシャロームへの旅であると言うのだ。もちろんそれは、平坦な道を最も効率よく、安全に行くものではない。そこには停滞があり、嘆きがあり、過去の痛みとの向き合いがあり、最も困難な赦しがある。けれどもその全てを、「希望をもって忍耐しながら生きていくというトレーニング」、それが「和解」という旅なのだ。

世界は今、この和解とは真逆の方向へと向かいつつある。本書を、時代遅れのお花畑と揶揄することは簡単である。けれども、現実の世界には、この神の新しく創造されるシャロームを待つ人々がいるのだ。ベネズエラのダンボールに寝かされたモーセたちも、その一人に違いない。

（えのもと・めぐみリアシユラムセンター主幹牧師）  
（四六判・二二六頁・本体二〇〇円＋税・日本キリスト教団出版局）

暴発するテロ、迫るファシズム、底なしの格差と貧困……。

現代の危機を  
神学の知恵で  
読み解き、  
希望への処方箋を  
提示する。



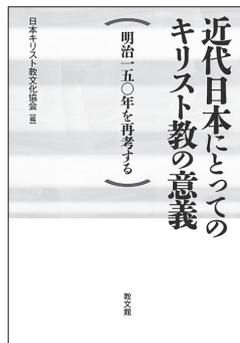
# 佐藤 優 富岡幸一郎 〈危機〉の正体

定価 本体1500円(税別)  
978-4-06-517434-0

〒112-8001  
東京都文京区音羽2-12-21  
講談社

# 気鋭の講師たちによる連続講演会 を追体験できる充実の内容

〈評者〉 鈴木範久



近代日本にとつての  
キリスト教の意義

(明治一五〇年を再考する)

近代日本にとつての  
キリスト教の意義  
明治一五〇年を再考する  
日本キリスト教文化協会編

日本キリスト教文化協会では、二〇一八年が「明治維新から一五〇年目にあたり、日本の近代化について包括的に考えさせられる年」にあたることから、「日本の近代化に貢献」した諸分野のなかから六分野を選び、その意義や問題を考える連続講演会を同年夏に開催した。本書はそのうち原稿化された五分野をまとめた書物である。以下収録録に概要でなく感想の一端を書かせていただく。

第1章は梅津順一氏の「ピューリタニズムと日本の共同体」である。日本のプロテスタントによるキリスト教受容が多く、その面でもピューリタニズムを基盤としている点をまず指摘、ついで、その代表として内村鑑三と徳富蘇峰を取り上げ、特に蘇峰の後半生における変容を論じている。内容に触発された評者の少年時代の記憶を加えるならば、某牧師の結婚に際し一長老の「新郎新婦ともキリスト教界の名家

ただし、同じ地方で若きころ結核療養をした先輩として親近感を覚える一方、青年期に直接賀川の話聞いた評者には、その大衆伝道法および人間観に対する疑問が、いまだ拭いきれないままである。

第4章は大西晴樹氏の「近代日本におけるキリスト教教育」である。いわば日本プロテスタント教育史と言ってもよい内容となっている。大きく「宣教師の私塾時代」「戦前のキリスト教学校」「船中のキリスト教学校」「戦後のキリスト教学校」と四つの時期に大別して、これを一回の話で全部たどっているから驚異である。大西氏は明治学院大学の学長と院長、キリスト教史学会の理事長経験者でもあるから、それに基づく視野は極めて広い。数多くあるキリスト教教育機関の一五〇年の話をまとめる力量に驚

の御出身」との挨拶が未だに忘れられない。日本の「イエエ制度」と差別感が、プロテスタント教会内にも浸透していたからである。

第2章は法学者の棚村政行氏の「日本の家族を支える法制度の変遷とキリスト教」である。封建制度下で定着した日本の家制度とキリスト教的一夫一婦制をめぐる民法上の葛藤と変遷の歴史である。日本では、戦後、最高裁長官にカトリックの田中耕太郎とプロテスタント(無教会)の藤林益三が着任している。この両者の当該テーマに関する言及があれば聞きたく思った。

第3章は金井新二氏の「社会改革的キリスト教の挑戦 賀川豊彦の場合」。賀川の生涯と思想と事業とを、短い講演のなかで、これほど過不足無くまとめた文章を他に知らない。さすがに賀川豊彦記念松沢資料館館長の話である。

かつて立教で聖職を目指していた学生が、学部廃止にともない慶応に転学させられたケースを想起した。

最後の第5章は小椋山ルイ氏の「近代日本におけるキリスト教と女性」である。はじめはアメリカにおける女性宣教師の話で紙数の約半分が使われていて行方が心配だった。しかし、日本の明治期の著名なキリスト教女性の恋愛と結婚の話となるや、本書のなかではもっとも筆がおどって面白い。百も承知とは思いうが内村の「クリスチャン、ホーム」論への言及もあってよい。

講演者のひとり若松英輔氏の文章の残念だが、この一冊で五回分の講演を十分に聞いたことになる書物である。

(すずき・のりひさ||立教大学名誉教授)

改訂版  
**キリスト者への問い**  
あなたは天皇をだれと言うか

松谷好明  
Yoshiaki Matsutani

いま、キリスト者として  
考えなければならないこと

信仰告白的に生きるとは  
どういうことかを真摯に問う。  
キリスト者として  
日本人として生きる上での  
重要な指針を  
与えてくれるであろう。

四六判変型  
定価【本体 1,700 + 税】円  
ISBN978-4-86325-117-5

株式会社 一麦出版社  
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10  
TEL (011) 578-5888  
<http://www.ichibaku.co.jp>  
携帯 [mobile.ichibaku.co.jp](http://mobile.ichibaku.co.jp)



# 対話へと促す 受容史研究への貴重な貢献

〈評者〉  
佐藤司郎



バルト神学とオランダ改革派教会  
危機と再建の時代の神学者たち(大森講座33)  
石原知弘著

教会史研究・バルト研究に、道しるべとなる好著が加えられた。若い世代による意欲的な研究の出版を共に喜びたい。カール・バルトが亡くなって今年で五一年、現在の研究動向をここで記す必要も余裕もないけれど、二〇〇〇年代に入って受容史研究とも言うべきものが折に触れ出版されていることは思い起こされてよい。

アメリカやイギリス、またドイツ以外のヨーロッパ諸国との関係の歴史を振り返って見るもの、アメリカの福音派神学の受容を個別的に問うものもある。日本の受容史の共同研究も十年前にすでに出ていた。本書も、広い意味でそうした一連の受容史研究の流れに位置づけられるものと思う。ただオランダ改革派教会及びその神学者たちとバルトの交流が長く深いことを考えれば、他の国また他の教派の受容史とはひと味もふた味も違ったものになるであろう。本

書はその特別の関わりを丁寧に辿り、知る機会の少ない領域についてわれわれの渴望を満たしてくれる。

全体はバルトの神学的履歴にそくして展開される。

第一章 神学者バルトの登場と二つのオランダ改革派教会  
一九一〇年代～一九二〇年代

第二章 バルト神学と危機の時代のオランダ改革派教会  
一九三〇年～一九四五年

第三章 バルト神学と再建の時代のオランダ改革派教会  
一九四五年～一九六〇年代

第四章 オランダ改革派神学の意義  
第一章で明らかにされる、二つのオランダ改革派教会、すなわち「国教会系」と「総会系」、この二つの教会のうち、

バルトをはじめ、「国教会系」の自由主義化を批判して登場した「総会系」に受け入れられたものの、やがて拒絶さ

れ、むしろ国教会系に受容されていく過程は、オランダの教会に不案内な私などには興味深いものがあった。

第二章では、ファシズムの台頭と戦争に向かう時代にバルトとオランダ改革派教会の関係がいつそう深まっていく様子が描き出される。ナチスによるオランダ占領下の抵抗運動の中で生まれた『アマスフオールト・テーゼ』は、著者も指摘するようにバルメン宣言を越えるものをもっていた。第三章は、戦後、オランダ教会再建の過程でのバルトとの関わり。たとえばフィッセルト・ホーフトによってバルトはエキュメニズムの舞台に引き出されていく。またファン・ルーラーやベルカウワーの貴重な仕事を紹介される。

第四章は、バルト神学に対する種々の批判的な問いを取り上げながら、オランダ改革派神学の意義を考察する。キ

リスト論的集中から三一論へ、そこから生じる歴史への関心、また聖霊論の強調など、神学的諸課題の整理がおこなわれる。

最後にひと言記せば、受容史とは結局対話の諸相を辿ることである。本書は、対話を豊かなものにするのはいつも対話の相手というより、われわれ自身だということを教えしてくれる。対話は今やエキュメニズムの本質であり、対話によってわれわれは宣教と神学の新たな地平を切り開いていかなければならない、そんな読後感をもって読み終えた。(さとう・しろう 東北学院大学名誉教授、日本基督教団仙台台北三番丁教会牧師)

(四六判・一一八頁・本体一〇〇円＋税・新教出版社)

ユダヤ教とキリスト教  
上智大学キリスト教文化研究所編

**ユダヤ教とキリスト教**  
上智大学  
キリスト教文化研究所編  
●四六判並製 本体 2,000円

本書は、2018年の聖書週間に上智大学にて行われた聖書講座をもとに、書き下ろした論集とシンポジウムを収録した。

**イエスの時代の言語生活**  
—イエスは何語を使ったか?—  
高橋洋成

●

**中世ユダヤ教世界におけるイエス**  
—聖書解釈と民間伝承—  
志田雅宏

●

**ホロコースト後のユダヤ人とキリスト教徒**  
—キリスト教への改宗者の戦後—  
武井彩佳

●

**シンポジウム**  
司会  
竹内 修一  
ISBN978-4-86376-076-9

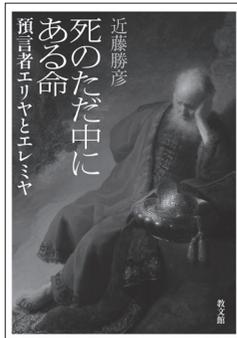
---

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402  
☎03-3238-7678 FAX03-3238-7638

## 預言者の受苦の生き様に 刺し貫かれる説教体験

〈評者〉左近 豊



### 死のただ中にある命

預言者エリヤとエレミヤ  
近藤勝彦著

本書は、銀座教会の主日礼拝において二〇一六年二月から今年二月までの三年間にわたってなされてきた旧約説教二五編からなる。紀元前九世紀、及び七―六世紀に活躍した預言者エリヤ、ならびにエレミヤが、二一世紀の現代に向けて、火を噴くように語りかけてくるのを、聞くことになる。そもそも預言者たちが聞き続けた神のみ言葉、生きて語りかけられる神との格闘と服従に、聖書の証言を通して触れることは、何にも代えがたい「賜物」であり「宝物」であることを著者と共に味わうことになる。

旧約預言者の言葉を、今日の礼拝において聞く、ということとは言うほどやさしいことではない。古代イスラエルを取り巻く複雑で広範にわたる歴史的環境の鳥観図を踏まえることは、必然的に当時と今の間に抜き差しならない緊張関係、あるいは超えられない溝を際立たせる。聖書の背後

にある歴史と現代を生きる私たちの間に横たわる他者性が否応なく立ち現われるのである。

本書は、そのような預言者の言葉の他者性を、むしろ、しっかりと担保し、神の永遠と超越が人の時間と歴史に介入したみ言葉の受肉として語られる、「教会」における預言者の説教の見本となる。ここには、教会を取り巻く現代社会の歪みや荒廃、悲嘆と絶望の深みを、預言者に託された神の言葉が、「生きていて、力があり、いかなる両刃の剣より鋭く魂と霊、関節と骨髄とを切り離すまでに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができる」こと、そして、その峻厳なみ言葉の前に、私たちが、代々の聖徒らと共に立っていることへの畏れと慰めが漲っている。

また牧会者である著者の視座が、死の現実に遣わされた預言者への問いと葛藤、そして格闘を、私たちが直面して

いる現実として捉えさせる。例えば最愛の一人息子を失った母親が預言者エリヤに向けて発した問いを、パラフレーズしながら、私たちへの問いとして受け止めさせる。「あなたは何のために来たのか、あなたは命の危機の中に何のために来たのか」「教会は何のためにあるのか、伝道者は何のために世にきたのか、罪を思い起こさせ、罪の報いを告げるためか。大事な子どもを奪われて、どう神を信じていけるか、神を信じて何になるか、多くの人が悲嘆の中で心に抱く問い」として。この問いに教会が、そして伝道者が与えられている言葉があることを、本書は預言者の熱情をもって語りかける。また地にうずくまって顔を膝の間にくずめて祈るエリヤ、与えられた務めを果たせない不甲斐なさにも自らを見限って絶望し、神への信頼も揺らいで、疲労困憊に押しつぶされて、もう終わりにしたい、と孤独と死に向かつて逃げゆく者の苦しみを受け止め、再度恵みの中に召し、派遣される神を、新約聖書に啓示された主イエスの御業において見ることへと読者をいざなう。

伝道者である著者が強調する主題の一つに「召命」がある。預言者らの召しと生涯は、私たちが、十字架と復活の主を身に纏って、この主を証しする使命に召された者として生きることを促し、そのキリストを証言する使命に「定年」がないことを示唆する。「召命は人間の時間だけで成り立つものではありません。神の時間、つまりは永遠の中に根柢をもって」おり、それこそが人生を支える、と。

この三年間の世界と社会の動向を、預言者の言葉を通して深く洞察した説教の数々の中に、脳梗塞で生死の境をさまよって数年のリハビリの後に再出発した牧師の言葉や、アフリカ系アメリカ人の霊歌が響きあいながら、魂揺さぶられる。魂を生き返らせる神の力に満たされる礼拝を求めて刻まれたメッセージの数々を、こうして噛みしめ味わう幸いを与えられていることに感謝する。

(さこん・とむ) 日本基督教団美竹教会牧師  
(B6判・二三四頁・本体一九〇〇円＋税・教文館)

## 歴史神学者ハルナックを 新たな視角から見直す

〈評者〉 安酸敏眞

アドルフ・フォン・ハルナックに  
おける「信条」と「教義」  
近代ドイツ・プロテスタンティズムの一断面  
加納和寛



Adolf v. Harnack

アドルフ・フォン・ハルナックに  
おける「信条」と「教義」

近代ドイツ・プロテスタンティズムの一断面  
加納和寛著

ハルナックは、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、ベルリン大学神学部教授として、ドイツの「学問的神学」界に君臨していただけでなく、プロイセン国立図書館長、カイザー・ヴィルヘルム学術振興協会初代総裁などの要職を兼任し、第一次世界大戦開戦時の皇帝演説を起草した人物でもあった。ハルナックと聞けば、ひとは大ベストセラー『キリスト教の本質』*Das Wesen des Christentums* (1900)、歴史神学の最高傑作『教義史教本』全三巻 *Lehrbuch der Dogmengeschichte* (1886-89)、あるいはそので打ち出された「福音のギリシア化」に関する有名なテーゼ（「教義はその構想においてまたその仕上げにおいて、福音の地盤の上でなされたギリシア精神のわざである」）などを連想するであろう。

その名は広く世界に知れわたっているにもかかわらず、膨大な量の著作や論文はわが国ではほぼ手つかずの状態で、

スを入れたことが、本書の誇るべき一番の創見であろう。本書の構成を簡単に述べると、序章「ハルナックとは誰か」で、ハルナックについての概要が語られたのち、第一部「ハルナックと使徒信条論争」では、ドライアー、カフタン、シュレンプフ、クレマー、ヤート（著者はヤートと表記しているが、正しくはヤート）の見解と突き合わせながら、使徒信条に関するハルナックの立場が分析される。第二部「プロテスタンティズムにおける使徒信条の位相」では、ルターやカルヴァンにおける使徒信条の位置づけ、プロイセン式文論争、シュライアマハーの礼拝改革案と使徒信条理解が論じられる。第三部「プロテスタンティズムと教義」では、プロテスタンティズムの「再カトリック化」問題、プロテスタンティズムにおける教義の問題などが考察される。補論として、ハルナックのルター理解と、彼とレオ・ベックとの関係が論じられる。

本書によっても神学的巨匠の全貌が解明されたわけでは

わずかに存在する邦訳書も『キリスト教の本質』以外は、もはや入手困難となっている。モノグラフとしては、深井智朗『ハルナックとその時代』（キリスト新聞社、二〇〇二年）が唯一のものであるが、これとても専門的研究書というより、むしろジャーナリスティックなタッチの読み物に属する。ハルナックの人と思想はかように、これまでわが国では安易な概観を許さぬ分厚いとばりに覆われてきた。ところが、このたび上梓された加納氏の書物は、その欠けを十分補う渾身作で、神学的巨匠の重要な一端を見事に照射している。これによって、「近代ドイツ・プロテスタンティズムの一断面」が、度の強いバルト神学的色眼鏡を介さずに、一次資料に基づいて忠実に描き出され、ハルナックの周辺事情も丁寧に解説されている。なかんずく、「信条」と「教義」という視点からハルナックとその時代の神学思想にメ

ないが、本格的なハルナック研究への確かな足場がこれによって据えられたと言える。マイナーな神学者たちの文献は、評者の手許にないので読みの精確さを請け合えないが、ハルナックとシュライアマハーについては、著者の読みにおおむね賛同できる。但し、*fides implicita* と *fides explicita* を「信仰の本質的なもの」「信仰の非本質的なもの」と意訳することに関しては、「核」と「殻」の概念との関連で、もう少し補足説明が要るのではなからうか。章節の構成に関しても、短い章を合体させるなどして全体の均整により配慮すべきだったであろう。しかし国内では入手し難い各種の原典資料に基づき、時間をかけて完成された労作なので、多くの読者に一読をお勧めしたい一品である。

（やすかた・としまさ＝北海学園大学学長）  
（A5判・三七〇頁・本体四六〇〇円＋税・教文館）

# 時空を超えて鳴り渡る福音の鐘

〈評者〉大頭眞一



メッセージ集  
神の狂おしいほどの愛  
松島雄一著

敬愛する松島雄一司祭（大阪ハリストス正教会）のメッセージ集が出ました。実はけっこうな数の牧師たちが、月刊『舟の右側』に連載されていた司祭の「東風吹かば」や、司祭が登録者に毎週メールしてくれる礼拝メッセージを密かに(?)楽しみにしています。その一人として、私もこの出版をたいへん喜んでいきます。

東方正教会と聞けば、多くの西方、つまり、カトリックや、特にプロテスタントは、警戒するかもしれません。特に礼拝堂に掲げられたイコンやさげ振り香炉から立ち上る香の煙を見るとおじけづくのも当然でしょう。けれども松島司祭のメッセージを聴くなら、それらの不思議な物や動作を透かして、時空を超えて鳴り渡る福音の鐘の音を感じる事ができるでしょう。その鐘を鳴らすのは、使徒たち以来の神父たち。私たちは聖書を読む世界で最初の人間ではあ

りません。教会がどのように聖書を読んできたのかを知るのはきわめて重要なことです。そこにも御霊の導きがあるのですから。少し引用します。

今日のプロテスタントの方たちにはその教義においても信仰生活においても生神女（評者注：神を生んだ処女のこと）マリヤの存在はほとんど無に等しいのではないのでしょうか。おそらくそこでは、間違っていたらおゆるしただきたいのですが、「神の子」をこの世に送るために神が一方的に選んだ「借り腹」としての意味しかないのではないのでしょうか。また「お言葉通りになりますように」という生神女の「同意」も実は同意ではなく、神の一方的な選びへの敬虔な畏怖の思いの表現にし過ぎありません。ここに近代的なキリスト教が「不純な信仰」、「偶像礼拝」とまで言って排除してしまった「生神女のとりなし」、さらに生神女を筆頭とする「諸聖人のとりなし」を理解する鍵があります。（二二〇―二二三頁）

いのではないのでしょうか

私たちは正教徒にとってはこれはまがうことなく同意です。天使が伝えた神の意志へのまったく自由な同意以外の何ものでもありません（中略）……生神女の同意は、しかし彼女ただひとりの同意ではありませんでした。正教会は生神女に人類全体をかさねます。罪を深め続け、その深みから救いを呼び求める叫びが極まったとき、神の救済の歴史の決定的な時と場所にマリヤは立ち、そして救いを求めるすべての人々の同意を自らの同意として表明しました……（中略）……生神女が同意したとき救いを求めるすべての人々が神の救いの意志に同意しました。神の子が人としてこの世に到来し、救いの完成に向けて歴史は急展開し始めました。その時以来私たち一人ひとりが神を信じ、キリストによる救いに「同意」する時、いつも生神女とともに同意します。生神女と私たちはともに信仰を生きています。ともに神の恵みを分かち合っています。ともに礼拝し、ともに祈っています。こ

福音が時空を超えて鳴り渡るならば、教会も時空を超えてひとつ。あまりに個人主義的、地域教会主義となった西方、特にプロテスタントに致命的に欠落した視点がここにあります。

書名となった「神の狂おしいほどの愛」は、一四世紀のニコラス・カバシラスによります。私たちには、激しすぎる言葉のように感じられます。けれども、神が私たちにとって、人となって十字架で死んだことは、確かに狂おしい愛です。イエスはほんとうに神なのですから。

（おおよそ・しんいち）日本イエス・キリスト教団明野キリスト教会  
牧師、関西聖書神学校講師

（新書判・二五六頁・本体二二〇〇円＋税・ヨベル）

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zeninkan_syoten_0530@afso.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 敷島センター・17F	022-223-2736	共用		fqcwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	〒新中延町2-2 榎ヶ丘センタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	350-1331	埼玉県狭山市新狭山1-5-1	042-900-2771	042-900-2722		seikoshoten@bible.or.jp	00160-2-18410
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taisindo-books.jimbo.com/	taisindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.bigoboe.jp	sksch@mva.bigoboe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunshala.coccan.jp/	nagoya-seibunshara@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびぶるすの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	共用		kobe-kirisyo@mse.bigoboe.ne.jp	01150-7-45120
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一丁目1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/masujama_1007/mexim	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用		kbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	903-0207	中環読字路777 沖縄キリスト教院内	098-943-7221	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

既刊案内 (2019年8月～2019年9月)(定価はすべて本体価格+税)

編・著・訳者	書名	判型	頁	本体価格	版元	発行日
近藤勝彦	命にあるただの死 —『預言者エリヤとエレミヤ』	B 6	224	1,900	教文館	8/10
広田叔弘	下をもう読もう —ひとすじの詩編	四六	224	2,000	日本キリスト教団出版局	8/23
石原知弘	ラオ会とオオ学 —バングラ改革派の危機と再建の時代の神学者たち	四六	118	1,100	新教出版社	8/30
鎌野善三	3分間のグッド —ニュース「福音」 —聖書通読のためのやさしい手引き書	A 5	304	1,600	ヨベール	8/20
日本キリスト教文化協会編	近代日本にとっての —キリスト教の意義 —明治一五〇年を再考する	A 5	184	1,500	教文館	9/10
G. プラスガー著 芳賀力訳	ハイデルベルク信 —仰問答との対話 —信仰の宝を掘り起こす	四六	320	2,900	〃	9/30
桜井健吾	ケテラとその時代 —労働者の司教 —19世紀ドイツの社会問題とカトリック社会思想	A 5	328	5,000	〃	9/30
E. ツェンガー著 佐久間勤訳	復讐の詩編をどう読むか	A 5	216	3,600	日本キリスト教団出版局	9/25
ヴォルフハルト・ベネンベルク著 佐々木勝彦訳	組織神学 第1巻	A 5	664	9,000	新教出版社	9/30
新井明	聖書の学び —新井明選集3	A 5	310	5,000	リトン	9/10
日本新約学会編	青野太潮先生献呈論文集 —イエスから初期キリスト教へ —新約思想とその展開	A 5	438	5,000	〃	9/13
日本聖書学研究所編	聖書学論集 50	四六	142	3,000	〃	9/30
賀来周一	命召・随想・器の土 —講演・随想・召命	四六	234	2,200	キリスト新聞社	9/5
越川弘英	論試改革 —礼拝を創るために —みんなで礼拝	A 5	192	1,600	〃	9/25
早坂文彦	パストラル・カウンセリング入門 [理論編]	四六	256	2,500	ヨベール	9/20
渡辺善太	渡辺善太著作選14 —善太先生「聖霊論」を語る	新書	208	1,800	〃	9/30

# 福音と世界

2019年12月号

## 特集 ネオリベリズム再考

寄稿者＝白石嘉治、堅田香緒里、生田武志  
大野英士 塩原良和 河口和也

書評 山下壮起「ヒップホップ・レザレクシオン」(浜邦彦)／好評連載 バビロンの路上で  
Cajunettes of a Son of a Preacher Man (フニエル・ヤン)、神の酒(石井光太)、教父学入門(土井健司)、遺跡が語るの聖書の世界(長谷川修一)、福音書記者たちの饗宴(松本あずさ)ほか

A5判・本体 588円・〒70円  
定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148  
Email: sales@shinkyō-pb.com

## 編集室から



「せみよ／長い年月をもぐったからこそ／いまを深くもつとなけ」(中西智海)という歌に出会った。成虫としての蝉は、わずか二〜三週間のいのちであるが、実際には長い年月を土中で過ごす。その幼虫期間は通常六〜七年、北米の「周期ゼミ」という種は十七年にもなるそうだ。それだけの長い年月を土中で過ごすしてきた蝉を、子どもの頃、採って集めていたとは申し訳ない。

格言に「蟪蛄(せみ)春秋を識らず」とある。蝉に春や秋を教えるも分からない、転じて頑固者に宗教的真理を教えるも信じないし、信じようともしないとの意味である。

## 予告

本のひろば

2020年1月号

## 本・批評と紹介

越川弘英編著『礼拝改革試論』、桜井健吾著『労働者の司教ケテラーとその時代』、菊地伸二著『今さら聞けない!?キリスト教―キリスト教史編』、佐々木炎著『どん底から見える希望の光』、広田叔弘著『詩編を読もう』下)他

しかし、蝉は幼虫時代に何度も四季を体験している。十分な下積みを積んでいるのである。

キリスト教詩人・石原吉郎(一九一五―七七年)が、詩壇にデビューしたのは四十才、論壇デビューは五十七才の頃だった。日本基督教団出版局から、『断念の海から』を上梓したのが六十一才、その翌年彼は不慮の死を遂げる。古い著作の多くは、今では入手困難となっているが、丹念に探せばアンソロジーやセレクションは見つかる。彼の表現者としての期間は、蝉のように短かったが、長い年月を地中にもぐってきた思想は、今もなお仲間を求めて深くないている。(寺田)

好評既刊



## 若者に届く説教

礼拝・CS・ユースキャンプ  
大嶋重徳 著

「説教とは何か?」「説教原稿をどのように作るのか?」という基本から、説教の構成や語り方、若者との信頼関係の築き方まで。復活の主イエスが現れたエマオ途上の物語から、説教に至る「途上」の大切さを丁寧に説き明かす。

● A5判・112頁・本体1,200円



## 人生を思い巡らす

静まりの時を持ってみませんか?

待降節から公現日までの黙想集

人生のただ中で神の不思議な介入を受け、不安と期待の中で世界で最初のクリスマスを迎えた聖書の中の人々。彼らは天使を通して語られた神の言葉と不思議な出来事をどのように受け止めたのでしょうか? デボーションにもプレゼントにも最適!

● 四六変型判・128頁・本体1,000円

# クリスマス約束

礼拝・CS・ユースキャンプによる37の黙想

大嶋重徳 著

好評既刊



## 旧約聖書の象徴世界

古来オリエンタル美術と詩編  
O・ケール 著 山我哲雄 訳

旧約時代の人々の思考様式を主題別に解き明かし、視覚的なアプローチで詩編の祈り手たちが思い浮かべるイメージの世界に近づく。図版約550点、写真約30点所収。

● B5判・464頁・本体9,400円



# 古代イスラエル宗教史

先史時代からユダヤ教・キリスト教の成立まで

M・テイラー/W・ツヴィツケル 著 山我哲雄 訳

二大宗教の起源と発展の

歴史を素描する

パレスチナで成立した二つの世界宗教はどのように誕生し、形成されたのか? 約1万年前から紀元後70年までの聖地に生きた諸共同体により営まれた多様な宗教実践の実態を、考古学的遺物や文献資料から浮き彫りにする。

● A5判・336頁・本体4,200円





# ミシュカ

◆ A5 変型判・本体 1300 円

文 マリー・コルモン／訳 みつじまちこ  
絵 フォードル・ロジャンコフスキー

ぬいぐるみのクマが、貧しい病気の男の子のために、自分をクリスマス・プレゼントにささげたお話です。

「パール・カストール叢書」中でも定評ある古典的名作。

# 主は偕にあり

田中遵聖説教集

田中遵聖／解説 神藏美子（写真家）

「アサ会」という独自の教会を立てた破格の牧師にして作家田中小実昌の父、遵聖。幻の説教集を復刊。無類な福音理解がほとばしる。

◆ A5 判・本体 3000 円

# 組織神学 第一巻（全三巻）

ヴォルフハルト・パネンベルク／佐々木勝彦訳

待望の邦訳がいよいよ開始。方法論的意識に貫かれた記述。第一巻は組織神学の性格、キリスト教の真理性の意味および神論を論じる。

◆ A5 判・本体 9000 円

# アモス書講義

改革者の肉声！

ジャン・カルヴァン／関川泰寛「監修」、堀江知己「訳」

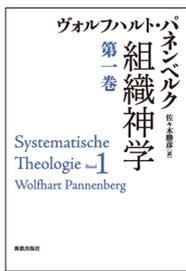
ヘブライ語原典を自らラテン語に訳し、逐条的に入念なパラフレーズを行う。ジュネーブ大学で語られた講義の、ライブ感溢れる記録。

◆ A5 判・本体 5000 円

# 夜と霧の明け渡る日に

未公開書簡、草稿、講演 ◆ 四六判・本体 2400 円  
ヴィクトール・フランクル／赤坂桃子訳

収容所からの解放と帰郷という彼の人生で最も重要な時期の伝記的な事実と、当時の中心思想の一端を示す。



一九五七年七月一日 第三種郵便物認可  
二〇一九年十二月一日発行（毎月一回一日発行）  
本のひろば 第七四四号 二〇一九年十二月号

発行所 〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1 一般財団法人キリスト教文書センター  
電話 03-3360-6148 振替 0170-512679  
発行人 本村利春 編集人 土肥研一 印刷所 佛平河工業社  
発売所 日本キリスト教書販株式会社 電話 03-3360-6148

定価七八円（税抜七一円）（〒63円）  
一年分一三〇〇円（送料共）